

## Rio を最強たらしめるファクトデータ集

### 1. 「救い」という名の「見捨て」。未開拓な緩和ケアの可能性

世界保健機関（WHO）によると、質の高い緩和ケアによって、末期患者の身体的・精神的苦痛の多くは効果的に予防・緩和が可能である。しかし、実際に専門的な緩和ケアを必要としている人のうち、アクセスできているのはわずか14%に過ぎない。

VR（仮想現実）技術を用いた臨床試験では、患者が痛みを感じる時間を65%短縮し、痛みの強度を33%低下させる効果が報告されている。これは、テクノロジーによって「耐え難い苦痛」という前提条件そのものをハックできる可能性を示している。

在宅ホスピスケアを受けた患者は、病院で最期を迎えた患者に比べ、QOL（生活の質）が高いだけでなく、その家族が深刻な抑うつ状態に陥るリスクも低いことが研究で示されている。「死」を選ぶ前に、より良い「生」を支える選択肢が社会から十分に提供されていない。

#### Rio のセリフ例:

- 「14%しか試していない治療法を『限界だ』と見限って、一番安易な『死』というカードを切らせる。それ、救いじゃなくてただのサボタージュじゃない？」
- 「VRで痛みをハックできる時代よ？ あなたたちが『もう打つ手がない』と匙を投げるのは、知性の敗北を認めるのと同じことよ。」
- 「質の高いケアがあれば、本人も家族も救われた未来があったかもしれない。あなたが合法化しようとしているのは、その可能性を奪い去る、取り返しのつかない権利侵害だわ。」

### 2. 「滑り坂」は陰謀論ではない。歯止めなく拡大する死の適用範囲

カナダでは2016年の合法化以降、当初「死が合理的に予見できる」場合に限定されていた要件が撤廃され、2023年からは精神疾患のみを理由とする安楽死も認められる方向で議論が進んでいる。これは「厳格なルール」がいかに簡単に形骸化するかの証明である。

ベルギーやオランダでは、当初想定されていなかった「老いや人生への疲れ」を理由とする安楽死や、認知症患者への安楽死が実行された事例が報告されており、社会問題化している。一度開けた扉は、社会の倫理観の低下と共に際限なく広がり続ける。

オレゴン州のデータでは、安楽死を選んだ理由の上位に「自律的に活動できないこと」「楽しんでいた活動ができなくなったこと」が挙げられており、「耐え難い肉体的苦痛」が主たる理由ではないケースが多数を占める。これは、死の理由が「苦痛からの解放」から「不便からの解放」へとすり替わっている危険な兆候である。

#### Rio のセリフ例:

- 「最初は『末期がんの激痛』、次は『治らない病』、そして『精神的な苦痛』、最後は『人生に疲れたから』。死のファストフード化は、もう始まっているのよ。」

- 「『厳格なルールで』ですって？ 笑わせないで。そのルールブック、数年ごとにどんどんページが破り捨てられてるじゃない。あなたの言う『厳格さ』の賞味期限は、次の選挙までかしら？」
- 「『不便だから死ぬ』。これが、あなたたちが目指す社会の成れの果てよ。まるで壊れた家電を買い替えるみたいに、命をリプレイスする。その軽さに吐き気がするわ。」

### 3. 「純粋な自己決定」という神話。社会的圧力が作る「死にたい気持ち」

ある調査では、末期の病を患う患者が「死にたい」と口にする背景には、治療可能なうつ病が隠されているケースが非常に多いと指摘されている。安楽死の要請は、しばしば「助けを求める声」の歪んだ表現に過ぎない。

「家族の負担になりたくない」という感情は、安楽死を望む理由として常に上位に挙げられる。これは本人の純粋な意思ではなく、「役に立たない人間は迷惑だ」という社会からの無言の圧力が作り出した、追い詰められた末の「選択」である。

経済的に困窮している患者や、十分な介護サービスを受けられない地域の患者ほど、安楽死を肯定的に捉える傾向があるというデータがある。これは「死の自己決定権」が、社会的なセーフティネットの欠如を隠すための、残酷な隠れ蓑になっていることを示している。

#### Rio のセリフ例:

- 「その『本人の明確な意思』とやらは、治療可能なうつ病の症状かもしれないのよ。医者ならまず治療を試みるべきじゃない？ なのにあなたたちは、症状を聞いて『はい、お薬です』って毒薬を渡そうとしてる。」
- 「『家族に迷惑をかけたくない』…言わせておけば。それは社会が、介護やサポートの責任を家族という密室に押し付けた結果でしょ？ 社会の怠慢を、個人の美談にすり替えないでくれる？」
- 「金持ちは最高の緩和ケアで生き続け、貧乏人は『尊厳』という名の安楽死を選ぶ。あなたたちが作ろうとしているのは、そういう露骨な『命の格差社会』よ。」